

## 伊賀市子ども読書活動推進計画の策定の経緯について

### (1) 子どもの読書活動の意義

子どもの読書活動は、言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、想像力を豊かなものにし、人生をより深く生きる力を身に付けていく上で欠くことのできないものです。

子どもは、読書を通じて、読解力や想像力、思考力、理解力、表現力等を養うとともに、多くの知識を得たり、多様な文化を理解したりすることができるようになります。また、さまざまな本等の資料を読み深めることで、自ら学ぶ楽しさや知る喜びを体験し、さらなる知的探究心や真理を求める態度が培われます。それは、「知りたい、学びたい、理解したい」という生涯にわたる学習活動の基盤となるものであり、社会の多様な変化や課題と向き合い、より良い社会に変えていくという、未来を切り拓く力につながります。

そのため、社会全体で子どもの読書活動を推進するための環境を整えることが極めて重要です。

### (2) 子どもを取り巻く環境の変化

近年、世界的な新型コロナウイルス感染症の感染拡大や、GIGA スクール構想に基づく ICT 環境の整備、少子高齢社会の到来、急速なグローバル化の進展、超スマート社会 (Society5.0) の実現に向けたデジタル技術の発展など、社会が大きく転換しています。これらのことが、家庭環境・生活環境の変化や価値観の多様化をもたらすとともに、インターネットやスマートフォン等の新たな情報メディアの発達・普及は、子どもの読書環境にも大きな影響を与えている可能性があり、「読書離れ」「活字離れ」などが懸念されています。

### (3) 国・県の動向

国は、子どもの成長過程における読書活動の重要性に鑑み、2001 (平成 13) 年 12 月に「子どもの読書活動の推進に関する法律」を施行し、国や地方公共団体の責務を規定しました。そして、この法律を受け「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画 (第一次)」を策定し、家庭・地域・学校等における施策を示しました。その後、5年ごとに改定し、2018 (平成 30) 年には第四次基本計画を策定しています。

また、2019 (令和元) 年に「視覚障害者等の読書環境の整備の推進に関する法律」の制定、2022 (令和 4) 年に第 6 次「学校図書館図書整備等 5 か年計画」の策定等を通じ、子どもの読書環境の整備が進められています。

そして、2023（令和5）年3月には、諸情勢の変化や第四次基本計画における成果・課題等を検証した上で第五次基本計画を策定しています。

三重県は、法律や国の基本計画をふまえ、2004（平成16）年3月に「三重県子ども読書活動推進計画」を策定し、概ね5年ごとに改定を行い、子どもの読書活動推進のための方策を示すとともに取組を進めています。そして、2020（令和2）年3月に第四次計画を策定しています。

#### （4）市の動向

本市においても、「子どもの読書活動の推進に関する法律」第9条第2項の規定に基づき、2008（平成20）年3月に第一次伊賀市子ども読書活動推進計画を策定しました。2013（平成25）年には第二次計画（計画期間5年）を策定し、第二次計画失効以降は、市総合計画及び市教育委員会教育方針への位置づけにより、子どもの読書活動の推進に取り組んでいます。

#### （5）これまでの取組の成果と課題

国・県及びこれまでの市の取組により、社会全体で子どもの読書活動の重要性が徐々に理解され、このことが以下の成果などにつながってきたと考えます。

2012（平成24）年度に、伊賀市で実施した子どもの読書活動に係るアンケート結果と、第二次伊賀市子ども読書活動推進計画の最終年度にあたる2017（平成29）年度に実施した結果を比較すると、「1か月に一冊も本を読まない小・中学生の割合」（不読率）は改善し、「本を読むのが好きな小・中・高校生の割合」も向上しています。

また、上野図書館や地域の図書室における児童書の貸出冊数は年々増加し、2023（令和5）年度は131,413冊になっています。

しかしながら、近年の子どもを取り巻く環境の急激な変化は、子どもの読書活動にも大きな影響を与えている可能性があります。全国学力・学習状況調査質問紙調査（対象：小学校6年生、中学校3年生）における伊賀市の結果をみると、「読書は好きですか」という質問事項では、平成29年度調査で「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と答えた児童72.2%・生徒74.8%に対し、令和5年度は児童71.0%・生徒66.3%となり、特に生徒は大きく下回りました。

また、令和5年度質問紙調査の伊賀市の結果では、「学校の授業時間以外に、普段（月曜日から金曜日）、1日当たりどれくらいの時間、読書をしますか（電子書籍の読書も含む。教科書や参考書、漫画や雑誌は除く）」という質問項目において、「10分以上」と回答した児童56.8%（全国60.0%）・生徒39.8%

(全国 49.4%) で、小中学生とも全国に比べて読書に親しむ時間が短いことが明らかになりました。

さらに、令和6年度質問紙調査においても、「あなたの家にはおよそどれくらいの本がありますか（一般の雑誌、新聞、教科書は除く）」という質問事項で、「0～10冊」と答えた児童17.7%(全国14.6%)・生徒19.6%(全国18.0%)で、全国に比べて家庭に本が少ない状況がみられます。

そこで、子どもの発達段階における読書活動の重要性に鑑み、家庭・地域・学校等のそれぞれの役割に応じた読書習慣の形成を効果的に図るため、改めて「伊賀市子ども読書活動推進計画」を策定する必要があります。